武庫川女子大学教育研究所　研究レポート　第41号　51－63
Research Report, No.41 Mukogawa Women's University
Institute for Education, 2011.（別刷）

自分らしく生きるために
―武庫川女子大学で学んだこと―

To Realize My Dream to be a Scientist

本　仲　純　子*

MOTONAKA, Junko

* 元徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部教授、武庫川女子大学薬学部卒業生

〔司会者〕

それでは時間になりましたので、ただいまから大学教育研究会を始めさせていただきます。

今回は、本仲純子先生にお越しいただいております。本仲先生には、昨年10月に行われた70周年記念シンポジウムにも来ていただいて、お話を伺いましたが、１人10分ぐらいしか話せないという中でのお話でした。先生は今年度で御退官ということもあり、もっとお話をお聞きしたいと考えまして、無理を言って再び来ていただきました。

この研究会の目的といたしましては、皆さんに差し上げた御案内にもあるとおり、まず一つめは女子大学での学びを振り返っていただくということです。そして二つめは女性研究者としてのキャリアの中での先生の御苦労とか、それを克服するための工夫とか、あるいは喜びとかについてお話ししていただくということです。そして三つめは、男女共同参画社会において、これから働く女子学生、あるいは職場の中ですでに働いておられる教職員を支援するための御示唆をいただくことです。しかし、これは名目上の目的でありまして、本音としては今日はザックバランなお話をしていただければと考えております。その後で自由に質疑応答をしていただきたいと考えております。肩肘張らずお気軽にお話いただければと思っております。

先生につきましては、私が紹介するより皆さんの方が多分御存じだと思いますし、それから、今からのお話の中で多分先生に自己紹介をしていただけると思いますので、早速、先生のお話の方に移っていきたいと思います。

それでは、先生、よろしくお願いいたします。

本日は、このような場にお招きいただきまして、どうもありがとうございます。光栄でございます。実はこの３月31日に退職いたしますので、そういう意味で呼んでいただいたのかなという気がいたしております。

私が今日に至るまで、どういうふうに考え、どんなふうにやってきたかということをお話しさせていただきます。皆さんの御参考になるかどうかわかりませんけれども、つたないスピーチをさせていただきたいと思います。

私は昭和20年の１月に生まれまして、８月が終戦でございました。ということは非常に物のない時代に育っております。物がないのでほとんどのものが手作りでした。人形は母の手作り、父が顔をかいてくれました。

私は４人家族でございまして、３才下の弟がおります。父はもともとは絵書きなのですけれども、「家族を養うためにはどうしてもお金が必要なので薬屋をやっている」と本人は言っておりました。母も薬屋を手伝っていました。結婚しまして７年ほど子供がございませんでしたので、私が生まれたときは本当に喜びまして、物のない時代ではございましたけれども、蝶よ花よと大切に育ててもらったようで、幸せな子供時代を送っております。子供のときから踊りとかお茶など、いろいろおけいこごとをさせてくれました。「財産は全部純子の体に入れた」と母が言っておりました。日本舞踊で４歳のとき初舞台を踏んでおります。それからお茶、お花、お習字を習い、さらに一流の家庭教師もつけてもらいました。そのころ戦後間もなくですので結構有名な方が疎開しておられまして、自宅まで算数と英語を教えに来てくれて、高校まで同じ先生が勉強を見てくれました。

羽ノ浦小学校を出て、徳島大学の附属中学校に入りました。田舎から１時間ぐらい列車に乗って行くのですが、最初は背が小さくて満員の列車の中で人に隠れてしまって、大変な思いで通学をいたしました。高校は有名な城東高校で、徳島では女子が行くには一番いい高校でございました。その後、徳島大学の薬学部を受験したのですが、失敗して武庫川女子大学の方に来ました。結果的にはそれで今の私があるというか、武庫川で培われたものが非常に役立っております。大学院は徳島大学の薬学部に入りました。徳島大学に入るときに、ドクターコースもできるということだったのですが、できなくて、最終的には博士の学位は東北大で取ることになりました。

私が子供のときから、母は何か困ることがあるといつも１人で口ずさんでいましたのは、「なせばなる　なさねばならぬ何事も　ならぬは人のなさぬなりけり」でした。それが、自然に私の体の中に入ってまいりまして、潜在意識の中にまで入ってしまっているような感じです。何か困ったことがあると、この言葉がいつも頭に浮かんでくるという状態でございます。「初志貫徹」、これも母がしょっちゅう言っておりまして、この二つの言葉が心の底の方に入っているんだろうと思います。

小学校のとき答辞を読み、中学校のときは歌ったり踊ったりが大変好きでございまし

て、NHK の合唱コンクールにも出場しました。残念ながら全国大会へは出られませんでしたけども、卒業時に音楽で中学校から表彰してもらいました。

高校でも音楽体操部で歌ったり踊ったりの学生生活を送っておりました。子供のときからずっと日本舞踊をやっていましたが、習っていた男の先生が途中で亡くなられたんですね。その後もぼつぼつやっていたのですが、音楽体操もやっておりましたのでバレエがどうしても習いたくなりました。武庫川女子大学薬学部の敷地の中の中正寮に住んでおりましたが、寮監さんに頼んでクラッシックバレエを習いに行かせてもらっていました。大学時代、神戸の国際劇場と宝塚劇場で「白鳥の湖」と「ジゼル」を踊りましたが、コールドバレエを後ろの方でやりました。バレーをやってわかったのですが、やっぱり日本舞踊の方がいいと思いました。日本舞踊は主役で踊れるけれども、バレエはその他大勢で後ろの方で踊るだけだったものでしたから。

薬学部は２回生でございましたので卒業生がまだ出ていませんでした。先生方は多分、大学の上層部から「国家試験100％合格」ということを言われて、すごい圧力がかかっていたと思います。先生方は必死で教育してくださいました。徳島大学大学院に入ってからわかりましたけど、授業科目とか単位数が多かったです。そのとき140数単位取っておりました。先生方から選択とか必須の指導がなく全部取りなさいということで、とにかくある授業科目を全部受講しておりました。授業料以上の教育を受けました。

大学寮の寮監さんは、非常に怖い寮監さんで、中学校の道徳の先生御夫妻で管理していました。今では考えられないような厳しい状態で朝晩点呼があり、部屋にいるかどうか朝７時に見回りにくるのですね。みんな起立して「おはようございます」と言う。そして夜は９時にホールに集まって、そこで訓辞があります。女性は女性らしく、いいお嫁さんになるために。この寮で４年間おりましたが、よいお嫁さんになるための教育をしっかりとされました。少しでも傷がついてはいけないというので、特に外泊するときは宿泊先で印鑑をもらってくるようにというのです。いついつ外泊しましたという連絡が実家の方に行くわけです。今では考えられないんですが、非常に手間のかかる教育をしていただきました。120人一緒に入寮したのですが４年後に残ったのは10人で、その10人の中に私も入っておりました。寮から大学の教室まで廊下づたいにスリッパで行けますので、非常に便利でした。ここで４年間おりましたので、父と母はそのことを大変喜んでおりました。しっかりと管理してくれているということで。

１年生に入ったときからずっと木村先生が担任でございました。卒業研究も木村先生の研究室で行いました。木村先生は今でも非常に私達のことを気にかけてくれております。例えば私が博士の学位を取ったときだとか、教授に昇進したときとか、その都度、非常に喜んでくれますのでそれが励みになっております。２年ほど前に、私たちの学年の同窓会を徳島でやりましたときも、来てくださいまして大変喜んでくださいました。

私は大学院にどうしても進学しないといけないと思いました。といいますのは、大学に入ったときに、自分がどんな職業についてどう生きていこうかと考えたからです。キュリー夫人の伝記を高校のときに読んでおりまして、漠然とですが研究者に非常にあこがれておりました。ここで薬剤師の資格を取った後、どんな職業があるかなと思って考えたときに、薬品会社に勤める、病院薬剤師になる、あるいは薬局に勤める。うちが薬屋ですので、薬屋の状況はわかっておりまして、あんまり魅力を感じませんでした。キュリー夫人伝を読んだ影響もありまして、大学の先生にどうしてもなりたいと思いました。それが18歳のときでございます。そう考えましたときに大学院に入らなくてはと思いまして、両親に話しましたところすぐオーケーしてくれました。木村先生に大学院に行きたいと言ったんですね。そしたら120人もいるんだから１人ぐらい変わったのがいてもいいだろうという感じで賛成してくれました。武庫川女子大のレベルがどのくらいか知りたいので、京都大学も受けてみるように言われました。それで京都大学の大学院も受験しましたが学んでいる内容が違っていて、書けませんでした。私は受ける前、大学で学んだことはほとんど全部復習をしたんですが、ほとんど記述式で解けない問題が出ました。両親は徳島の方へ帰ってきてほしいということでした。武庫川女子大学からは無試験でどうだろうと言われたのですが、母が帰ってきて徳島大を受けるんだったらさらに賛成だということで、徳島大学大学院薬学研究科を受けました。運よく、たまたま合格したわけでございます。

徳島大学大学院に入ったとき、研究室に30歳の女性の先生が働いておられました。徳島大学の薬学部では女性の教員は、助手ではおられましたけれども、上のポストには全然上がれないような感じでした。後ほどこの先生は医療短期大学部へ移動されました。この先生は非常に考え方がしっかりしていて、困ったことが生じても全然びくともしないような方でございました。先生は二十歳のときに御両親を亡くされておりまして、１人で生きてこられたという自信があるのか、どんな問題が起きてもきちんと自分で処理されるような先生でございました。私にとりまして最初のロールモデルといいますか、ああいう生き方があるんだなと思いました。先生は、私が教授に上がれるかどうか、ずっと心配してくださっていたようでございます。

徳島大学の裏に眉山という山がございまして、そこでいろんな薬用植物を採集しました。大学院ではそれを乾燥して成分を抽出して分析するということをやっておりました。修士論文では、薬用植物の中のサポニンとアミノ酸を分析いたしました。

その後、私はどうしても大学院のドクターコースに行きたいと考えました。マスターコースに入ったときに、徳島大学の薬学部にもドクターコースができると聞いていたので、期待してずっと待っていました。しかし１年たっても、２年たってもできなくて、そのまま徳島大学工業短期大学部に助手で着任いたしました。就職した時に初めて自分が女性であるということを認識いたしました。それまで、働く上での男性と女性の差を全く考

えておりませんでしたが、初めて自分が女であるということを認識せざるを得ないような状況に陥りました。

大学の助手になって、組織がえ等いろいろありました。助教授には上がったのですが、この間、25年間助手をしておりました。非常に私にとっては考えさせられたり、苦痛を味わった25年間でございました。同時期に着任して同じように仕事をしているはずの男の人たちはみんな昇格していって、残っているのは自分だけという状態が続きましたので、自分がどうあるべきかとか、何がいけないのかとか、考えざるを得ない状況に追い詰められておりました。幸い教授に昇任してからは大学のいろんな役職もつきまして、工学部の副学部長も４年させていただき、今は学科長と職員相談室の室長もさせていただいております。非常に幸せにやっております。

ここで私の助手時代に話をもどしますと、研究の面で私は着任当時の助教授の先生の下で先生がやられている研究の続きのような研究をずっとしておりました。研究自体は、実際に自分が実験をし、学会で発表して、論文も書いておりました。ところが、短絡電流滴定法を用いる微量分析法の開発をずっとやっておりましたけれども、それがドクター論文に使えないという状況に陥りました。

このころ、結婚して間がないころですが、非常に悩みました。私は、中学校のときに芹沢光治良先生の『巴里に死す』という小説を読みました。中学校１年生のときに『女学生の友』にカット絵入りで載っていたのに興味をもって原本を読み、非常に感動しました。その後『人間の運命』など芹沢先生の本をたくさん読んでおりました。先生は女性についてたくさんの小説を書いておられました。私は自分が女性であるということは一体どういうことなのかということを考えざるを得なくなって悩みましたときに、この先生のことを思い出しまして、手紙を書かせてもらいました。「自分はこういう職業についているんだけども、女性であることについて悩んでるので、先生の御意見を聞かせてほしい」と手紙に書きましたら、１週間ぐらいしてすぐ返事がきまして、いついついらっしゃいということになりました。私は喜んで主人と２人で先生の家へ伺いました。主人は日本舞踊を職業にしております。日大の芸術学部の演劇学科歌舞伎舞踊専攻を卒業して、日本舞踊をずっとやっています。実は主人が６歳、私が４歳で同じときに初舞台を踏んでいまして、子供の時から知っている仲でございます。主人は12歳で家元によばれて上京し、東京で尾上梅幸さんのところにも勉強するために通っておりました。

働いていると女性の結婚というのは非常に大きな問題になってくると思います。ざっくばらんに申しますけれども、着任したときに教授から「あなたは女です」、「女だからあなたには学位の世話はしません」ということをはっきり言われました。仕方がないので「私は自分で取ります」とそのとき宣言したんですが、まあ生意気であっただろうと思います。さらに、結婚しようとしたときも大変でした。主人の職業が日本舞踊という少し変

わった職業でしたので、両親も上司も反対しました。もちろん両親は主人のことを知っておりましたし、私は主人の両親を子供のときから見ておりましたので知っておりました。しかし、私の親としましては、医者か大学の先生ならオーケーだけれど、職業がら不安定な結婚には反対されました。その間いろいろお見合いもさせられました。私はずっと大学の先生を続けたいと思っておりました。ある開業医の方とお見合いをさせられたんですが、とにかく働くのはやめてすぐ家に入ってほしい、あるいは薬局で調剤するのは結構ですみたいな感じで、大抵はすぐに仕事をやめて欲しいということでした。これには私は納得できませんでした。ずっと働こうと決心していました。

母は、非常に子供をかわいがっておりましたので子供中心の家庭でした。母は私にとっては非常にありがたい存在だったのですけれども、私のことで一喜一憂するわけです。私が家からはなれ武庫川女子大に出て、その3年後、弟も京都薬科大学の方に出ました。そうしますと、母は子供がいなくなったことがさみしくて、うつ病じゃないですけど、ほとんど食べられない状態が半年ぐらい続いたわけです。そういう母を見ましたときに、自分にとってはありがたいんですが、自分がこういうふうになるのはいやだと思いました。自分のやりたいことを母は私に託しているような感じがありました。やりたいことを母のように子供に託して、夢をすべて子供に託して生きるのはつらいと思ったんですね。そのときに自分のやりたいことは自分でやろうという決心をいたしました。

結婚もやはり自分の結婚であると考えました。「大病院のお医者さんの奥さんというのは、非常にいい」と母は言っておりました。しかし働くという面からしますと、やめてほしいというのは困るわけです。主人の考えの方はそうではありませんでした。主人の仲間にもたくさんの女性の舞踊家がおられるのですが、大抵は結婚とかを機に簡単にあきらめてしまっている。主人にしてみれば、大学時代あんなに必死で議論した舞踊観というのは一体何なんだと思ったそうです。せっかく勉強したのだから、どうしても勤めたいのだったら勤めるべきだという考えを主人は持っておりました。工学部の若い先生方もいろいろと結婚の候補に上げてくれたんですが、やはり結婚観がずれているようで、私としては結婚することができませんでした。自分が職業を貫くためには、やはり自分の職業を支持してくれる人と結婚しようと思ったわけです。ただ、その相手が舞踊家という私には思ってはいなかった分野の職業でした。しかし、その考え方や価値観が一致し、この人と結婚すればうまくいくであろうという確信を持って主人と結婚いたしました。随分いろんな面で支えてくれております。

なお、大学の上の先生の反対はプライベートな事なので納得できませんでした。2年後に28才で両親に賛同してもらってやっと結婚できました。

芹沢先生にお会いしましたときに、「今、日本はまだ少しおくれているけれども、ヨーロッパだとかアメリカの方では大分女性が重要な地位についてきている。だから日本も間

もなく女性がそういう職業の場で力を発揮できる時代は来るので、しっかりとそのつもりで頑張ってください」と励ましをいただきました。そのときにキュリー夫人の話をしてくださいました。芹沢先生がパリに留学されているときに、キュリー研究所に友達がおられて、何度もその研究所を訪ね、キュリー夫人とお話しする機会がたびたびあったということでした。そこでキュリー夫人に、子供を育てることと研究することをどういうふうに考えているかということを尋ねたところ、どちらも社会奉仕であると言われたようです。研究することは社会に対しての奉仕であるが、よい子供を育てることも社会奉仕の一つだから同じ次元だと言われたということでした。このとき私は、ああ、そういう考え方があるのかということで、女であることの一つの意味を認識することができて非常に力づけられた、勇気づけられたという感じで、心を改めて大学の方に戻ったのでございます。

その後、芹沢先生は「よりそいて　いく久しき空のもと　大樹になれかし　よき二人はも……」という言葉を色紙を書いて送ってくださいました。これは家の中に掛けて、いつも見られる状態にしております。

大学の上の方からは、女性であるから学位は取らせないと言われましたので、なんとかしないといけないということで非常に自分自身もやもやした感じで焦っていました。京都大学の方に手紙を書きまして、ドクターコースへの入学の問いあわせました。そのころ私の関係した学会分野で京都大学のＦ教授が非常に有名でございました。大学院のドクターコースへ進みたいので受け入れてもらえないかと問い合わせたのですが、京都大学を卒業、修了した人しかドクターコースには受け入れないという返事でございました。研究生で受け入れてもらえないかとたずねました。それも３年先までもう決まってるので受けられないということでしたのであきらめました。

学会の方には定期的に出ておりましたら、田中（東北大学）先生がたびたび私の研究発表に対して質問をしてくださいました。あるとき、学位を見てあげますよといってくださいました。しかしその時、田中先生が非常に立派な先生だということはちっとも存じませんでした。後で知ったのですが、田中先生は文部科学省の在外研究員制度ができた時の第１号でございまして、東大始まって以来の優秀な方ということで有名な先生でした。この先生が学位の面倒を見てくれるということでございます。「いくつ論文がありますか」と聞かれたのですが、そのとき14報の論文がありました。しかしながら教授から、その論文は自分の一連の研究であるからと言われましたので、そのことを田中先生に申し上げましたら、じゃあ今から始めましょうということになりました。そこから少し違った分野での研究を始めることにいたしました。イオン選択性電極というのがそのころ新しかったもので、これを使って研究を始めました。１本10万円でしたけど、これで一応ドクター論文ができました。これが最初の英文論文ですけれども、先生に随分指導していただきました。最初、ヒドラジンの定量に関して日本語の論文にしなさいということでした。続いてヒド

ロキシルアミンも同じように定量しましたところ、それも日本語の論文にしなさいということでした。二つを論文にして持っていきましたところ、よく似た論文なので一つにまとめなさいといわれました。一つの論文に仕上げて持っていきましたら、それを英語に直しなさいといわれました。英語の論文一つつくり上げるまでに結局１年かかっております。でもそういう指導で初めて英語の論文を書くことができました。

私は薬学部出身ですので、少し特徴を出さないといけないと思いまして、分析する対象物をできるだけ生体関連のものを選んで分析いたしました。そのころ日本語論文は手書きでございまして、コピーもございませんでした。ドクター論文を300ページぐらいで書くのに非常に苦労いたしました。６年間かかってドクター論文を完成しました。

学位（理学博士）授与後、田中先生がただ定量するだけではおもしろくないので、電極を自分でつくったらどうかと言われました。何も基礎はなかったのですが、電極を幾つかつくりはじめました。一番最初につくったマンガン電極です。文献で調べましたところ、マンガンとかクロムをはかる電極は報告がありませんでしたので、田中先生にそのことを申し上げましたら、「それでは自分でつくりなさい」といわれました。でも実際に徳島大学の方で上の先生に言いますと、非常に怒られました。「今まで電極など作った事がないのに何であなたにできるのですか」と。しかし田中先生に言われているのでとにかくやらなきゃいけないと思ってとりかかりました。田中先生には大変厳しいことも言われております。

はじめて作製したマンガン電極がたまたま運よくアメリカ化学会の会員誌 CHEMICAL & ENGINEERING NEWS に顔写真入りで紹介されました。この電極の構造に新規性はなく既存の液膜型の電極をつくっただけなんです。ただこの電極の硫化マンガンというのは溶解度が比較的大きくて、頭のいい人ならつくらなかったと思うんです。私はあんまり頭がよくありません、先生がつくれと言うのでつくりましたところ、珍しいということで会員誌に載せてもらうことになったわけです。

その10年後、イリノイ大学に留学することになりましたけども、その前に皆さんにお話ししなくてはならないのは出産の事です。学位を取りまして、２年後、38歳になったときに同級生が子宮がんで子宮を摘出いたしました。これは私にとりまして非常にショックでございました。「子供が生まれた時にはやめてほしい」ということはよく言われました。相手は何げなく言っているのだと思うのですが、私には非常に心に残りました。そのように言われたときには「私は子供は産みません」と言いました。以前結婚についても「結婚するならやめてほしい」と言われたので、「どうしてですか」と聞いたんです。そうすると「女の人は結婚すると手を抜いてあんまり仕事をやらなくなる」と言われました。それはいけないと思って、結婚はしましたけど手は抜かないように努力いたしました。できるだけ仕事をしっかりするようにということで、結婚した前と後で変わらないように努力い

たしました。それを言われていなかったら努力してなかったかもしれません。でも結婚自体はプライベートなものであって、大学の公的なものではないと思いましたので、私もそのことに対しては反発いたしました。結婚した後もやめなかったので、せめて子供を産むときはやめてくれということでした。そう言われると産めないんですよね。助手というポストは非常に立場が弱いものですし、状況もよくわからないんですよね。助手は一人前でないといいますか。

友達が38歳で子宮を摘出したことは非常にショックを受けました。「そうだ、女性は子宮がなくなると子供が産めないんだ」と気付きまして、そのときは真剣に出産について考えまして、どうしても子供を産もうと、このとき思いました。その前は何となく、子供は何というか、しばらく産めない、欲しいとは思っておりましたけど、今は産めないと思って暮らしておりました。道端なんかで朝大学へ行く時とか、夕方帰ってきたときに子供たちを二、三人遊ばせながらお母さんたちが寄って、井戸端会議をしてるんですよね。その光景を見ると涙が出ました。子供を産みたいのに産めない状況に対しては非常につらいと思いました。でも、どうしても勤めていたいという気持ちが強かったものですから、もう少し先に延ばそうとして、出産はずっと後になりました。38歳のときに友達の子宮摘出でショックを受けまして、どうしても子供が欲しいというので出産をしたいと思いました。ありがたいことに41歳のときに妊娠しまして、42歳で子供が生まれました。1人だけですけども、私にとっては非常にありがたい子供でございます。

授業や研究にできるだけ影響を与えたくないと願っていました。生まれる子供に思いが通じたのか、出産前日まで休まず大学へ通い授業もでき、夏休みに入った日に出産いたしました。この時ばかりは、健康な身体に生んでくれた母と自然の神秘に感謝せずにはいられない気持ちでした。妊娠して母親の体内で子供が発育していくこと、それにあわせて母体も変化していく過程は実にち密で精巧であります。人間の力がおよぶ範囲ではありません。頭では理解していても、感動をもって実感するのははじめてです。このち密で精巧な自然の営みが、人間、あらゆる生物、地球のみならず宇宙でも行われている事を考える時、自然に感動し感謝せずにはいられません。

人間すべて、出産までの10ヶ月間を女性の体内ですごします。直接母体とつながり、行動を共にするということは、その後に偉大な影響力を持っているにほかなりません。そう考えると出産はなかなかやりがいのある仕事です。が、しかし、その反面女性の無知はおそろしい結果を生む可能性があることも自覚したいと思います。

この不思議な大自然の中にいて、その精巧な仕組みに感動しつつ、わずかでも自然の神秘を知りたいと望んでやまない一人であります。

その後、子供が4歳のときにイリノイ大に行くことになりました。周りの先生たちはどんどん外国へ行って研さんを積まれておりましたので、私も行くべきだと思いまして留学

したいと考えました。博士論文の主査をしてくださった田中先生が３度ぐらいポスドクでの留学の話を持ってきてくれました。その都度、上の先生にそのことを申し上げたのですけど、出してもらうことができませんでした。実は学位を取ったときも、東北大の決まりとして１年間だけ内地留学するシステムになってるようでした。大学の方にそのことを申し上げましたけども、１年間も出るのはままならんということで反対されましたので、田中先生に「出してもらえません」と言いました。そうすると田中先生は「あなただけ例外的に内地留学なしで学位を出しましょう」と融通してくださいましたので、ありがたいことに学位を取ることができました。

46歳のときにもう何が何でもやめさせられないだろうと思って、このときに思い切って大学を出してもらうことにしました。

留学先の大学を選ぶときに田中先生に相談しました。アメリカの化学分野でイリノイ大学は５位ぐらいです。主人は日本文化としての歌舞伎をやっていますが、「日本文化という分野はイリノイ大しかありませんよ」といわれました。田中先生のお知り合いに横浜国立大学の仁木先生という方がおられました。その先生がアメリカの大学をよく御存じで、イリノイ大を紹介してくださいました。夫婦でこの大学で研究したり教えたりすることができました。

私が行きましたイリノイ大学のフォークナー先生という先生は、とても偉い先生でした。行ったときに学部長をされておりまして、後からアリゾナかどこかの学長になられました。電気化学の方面でも世界的に有名な先生でございます。

研究室の人たちも国際的でございまして、あらゆる国からいろんな方が来ておられました。大学のアパートに入ったその次の日に、主人はイリノイ大学の学生さんとシカゴ市民でつくっているピープル劇団とともに、ギリシャ悲劇を題材にした演劇を持ってヨーロッパの芸術祭に参加することになりました。主人を採用してくれた教授の佐藤先生が主人にぜひ歌舞伎の演技指導で同伴してほしいと言われたからです。アパートに入った次の日から主人は１カ月不在でした。その間私はおばあちゃんと４歳の子供の三人で暮らしました。

話はさかのぼりますが子供が生まれた時、主人の父は亡くなっておりました。主人の母が別の家で一人で住んでおりました。母は１人になって何もする気がなくなって、健忘症になりかけておりました。そういうところへちょうど私の妊娠が決まったわけです。途端に元気になりまして、毎日楽しみにして布おむつを200枚以上縫い上げました。そして孫の世話をしたいと言いだしました。医者に相談したところ、「とてもできる状態ではないが、それほどしたいというなら、様子をみながら世話をさせてあげるように」ということでした。母はとても楽しそうに孫の世話をしてくれました。そうこうしているうちに、母の七ヶ所ぐらい悪かった病気がよくなってしまって、お医者さんはびっくりしていまし

た。私自体も母のおかげでいろんな要望をすることができましたので、教育の面でも非常によかったです。

例えば、「お母さん、もし娘がこの本を読んでくれと言ったら読んであげてくださいね」といって、絵本をそばに置いて読んでもらうようにしました。そうするとある日、帰ったら母がぼうっとした顔をしているので、「どうしたんですか」とたずねたら、「この『おつきさまこんばんは』という絵本を朝から今まで読んでくれと言われつづけて、100回以上読んだんだけど、まだ読んでくれと言うから頭がぼうっとしている」ということでした。お金を出して近くに預けていたらそういうこともできなかったと思うのですが、母だからいろんな注文を聞いてくれ、私としては非常にありがたかったです。

留学が決まった時も、「ついて行きたい」との母からの希望で、家族４人で渡米しました。

娘をイリノイ大の保育園に預けたのですが、その送り迎えももちろん喜んでしてくれました。全然英語も何もできないのに、外国人の金髪の人とかに「ハーイ」とか手を挙げ声をかけるんですよ。全然中国語もできないのに、同じ年ぐらいの中国人の家に上がってたりね、もうわけがわからない。同じ日本人で留学されているいろんな人からの情報を集めてきて、私に話をしてくれるのです。

だから１ヶ月間主人はいませんでしたけれども、結構楽しくやりました。日本ではペーパードライバーでしたが、このときから車に乗りはじめました。あちらの方では車がないと買い物にも行けない状態でございましたから…。

イリノイ大学には２万人ぐらいの学生さんが在籍していました。その中の100人だけをより抜いて特別教育をしていました。将来のリーダーを養成するために、特別教育を大変お金をかけてやっていたんです。その特別教養教育のクラスに講師で呼ばれました。スキップして早く学位を取る人がいるので、16歳ぐらいのあどけない顔をしている大学生が堂々と討論をするものですから、その顔とのギャップに非常に戸惑いました。日本には伝統と文化がずっと息づいていて、しかも世界で一番という科学技術がある。どうしてそれらが同じ国の中で同時に存在してるのかというのが、非常に不思議だというので、そのための討論に呼ばれました。その後、主人と私の歌舞伎舞踊家と化学者の組み合わせの非常にユニークな夫婦であるというので、また２回ほど、ユニークな夫婦研究ということで呼ばれて討論のテーマになりました。

帰国後も留学中の微小電極の研究を継続し、現在まで多勢の学生さん達が発展させてくれております。今の研究の基礎というのは田中先生からの「電極をつくるように」との指導から始まりました。アメリカへ留学して、マイクロセンサーを勉強し、その後さらに発展させて、今はいかにすれば簡単に安定した電極をつくれるか、長期間使用できるか、測定精度がよくなるかという研究をやっております。同じ徳島大学生物工学科の先生が、温

泉水の中から熱に強い酵素を取り出して、それを使ってくれないかといわれました。Ｄ－アミノ酸が増えるとアルツハイマーになるということが最近やっとわかってきましたが、このＤ体を測定するセンサーを作製しております。カーボンナノチューブなんかも使って感度のよい電極をつくっております。

幸いなことに2007年に徳島新聞賞（化学賞）を受賞させていただきました。着任当初からの知人が工学部長になりましたときに副学部長をやってほしいと言われて、４年間副学部長をさせていただきました。そのときに学部長から推薦をいただきまして、徳島新聞賞を受賞することができました。武庫川女子大を卒業された先生が同時に教育賞をもらわれました。武庫川出身者が同時に２人受賞したのはすごいなと、このときは大学を自慢に思いました。

私は日本分析化学会に属しているのですが、この学会は全国を七つのブロックに分けて１年ごとに年会が回っていきます。しかしこれまで四国で開いたことは一度もありません。中国四国支部のときに、たまたま白羽の矢が立ちまして、徳島でやらないかということで私が実行委員長をさせてもらいました。ありがたかったです。日本分析化学会の実行委員長に女性がなったのは私が最初でございました。年会が成功いたしまして、皆様から褒めていただきました。

それから副工学部長をしておりますときに、役得でございますけども、ノーベル賞を受賞された小柴先生とも親しくお話しさせていただきました。

研究とは関係ないのですけども、趣味で私は生け花とお茶と日本舞踊を続けて今もやっております。26歳のときに生け花使節団としてニースに10日ほど滞在しました。モナコ宮殿に日本人が上がったのは私たちが最初でございまして、このときにグレース王妃に会うことができました。ブルーのシンプルな服を着ておられました。非常に品がよくて、笑うと口元がとてもかわいい感じの王妃様でございました。王妃様のおつきの方からフランス人形と香水を１人ずついただきました。行ったのは40名ぐらいですが、このときにそれまでに経験したことがないような楽しい思いを味わいました。上流社会に入った、そういう気分です。音楽に合わせてダンスをしたり、皇室関係の人たちと一緒に食事をしました。第１回の日仏友好協会がこのときに結ばれました。２年ほど前の「世界ふしぎ発見」のテレビ番組でこのことが紹介されました。

職業柄、多くの国に海外出張いたしました。インドにも行きました。田中先生がミネソタへ留学されたときに、インドからカプール先生が同じところへ留学されていました。このカプール先生がインドのジョドプール大学で国際会議をするから来てほしいという話が、田中先生のところにありまして、私の方に回ってきました。ぜひインドへ行きたいと思いました。行くことを決めた後で、田中先生はやめた方がいいのではと反対の電話をくださいました。「行ったら死んでしまうかもしれない」ということでした。1500年の歴史

が混在した大変な国でした。帰ってから下痢が３カ月ぐらい続き３ kg ほど体重が減りました。インドではプンゴール博士と同じホテルでした。この先生は、私が研究を行っておりましたイオン電極をつくられた大変有名なお方で、先生と親しくお話しすることができました。その後、アラブ首長国連邦の方にも行くことができました。JICA の方にも短期専門家として、行かせてもらいました。科学研究費補助金も５件ほど採択されました。東南アジア地酸性雨の研究で３年間で10回ほど東南アジアの国々へ行かせていただきました。

ルーマニアにも「化石燃料排出成分の実態調査」で科学研究費補助金で行かせてもらいました。エチオピアのゴンダール大学とも一緒に研究いたしておりまして、エチオピアを２回訪問いたしました。大変貧しかったです。多くの人が医者にかからずに死んでいってるわけですね。戸籍のない子供たちもたくさんいました。スラム街の子供の中にはトラコーマにかかり全然目が見えない子もいましたし、皮膚がエイズその他もろもろの菌で水膨れになっていました。一緒に行った皮膚科のお医者さんも「こんなにひどいのは見た事がない」とびっくりしていました。

大学に勤めさせて頂きましたことで、貴重な経験ができ充実しておりました。生まれ変わってもまた大学で勤めたいと思います。

まだいろいろとお話したいことはございますが、ちょうど時間となりましたので、この辺で私のスピーチを終わらせていただきます。

ご清聴どうもありがとうございました。